



書首

深氏物語

卷五下





三十四

○猫とくううく 細東宮猫と愛はれ心有

うねこの 細 柏木詞

○さるやうなる 孟 柏木の猫はとれんは
P. 100 也

○さうつふのぬき 細 明石中宮より入て廿三
宮へいぬ也

ねーとまうしぬくねにまうし
らうしぬくねにまうしぬく
くしぬくねにまうしぬく
うしぬくねにまうしぬく
しぬくねにまうしぬく
ぬくねにまうしぬく
くねにまうしぬく
ねにまうしぬく
ぬにまうしぬく
にまうしぬく
まうしぬく
うしぬく
しぬく
ぬく
く
ね
に
ま
う
し
ぬ
く

○さうつふのぬき 細 春宮のぬきはさうつふ
ねぬきとすさうつふぬき也

○さうつふのぬき 孟 柏木のぬきよりまうつ也

○さうつふのぬき 弄 右衛門督は東宮よりま
うつふぬき也

○さうつふのぬき 花 右衛門督猫とめさう
つふぬき也 高砂のぬきとめさ
うつふぬきのぬき也

ねーとまうしぬくねにまうし
らうしぬくねにまうしぬく
くしぬくねにまうしぬく
うしぬくねにまうしぬく
しぬくねにまうしぬく
ぬくねにまうしぬく
くねにまうしぬく
ねにまうしぬく
ぬにまうしぬく
にまうしぬく
まうしぬく
うしぬく
しぬく
ぬく
く
ね
に
ま
う
し
ぬ
く

○大將の君を孟 歸里也 孟兵部神ハをト
人ならいやはい

○このしと 或扱 心もくもくもいぬ也

○このしとのそき 細 此兵部之のわくし
はとさきぬよりくく我れしれし
ととぬ也 或扱 已下至く心也

○このしとのし 或扱 實の心方よりぬく
又實心と心くく

○このしとのし 或扱 實の心方よりぬく
又實心と心くく

○このしとのし 巴 扱 大將のくす手くく
ととくく

○このしとのし 巴 扱 大將のくす手くく

○このしとのし 細 玉くくもま本柱のく
しぬ也

○このしとのし 弄 玉くくのたよりま本柱の兄
カシてしぬいぬと真本柱の祖母れ
巴扱 兵部へ横柱の是非もくく
ま本柱へりてくるれねと祖母ハく

ららららららららららら
はらはらはらはらはらはら
くくくくくくくくくくく
わりりりりりりりりりり
たりりりりりりりりりり
おらららららららららら
わらわらわらわらわらわら
あらあらあらあらあら
がらがらがらがらがらがら
はらはらはらはらはらはら
ららららららららららら

ららららららららららら
はらはらはらはらはらはら
くくくくくくくくくくく
わりりりりりりりりりり
たりりりりりりりりりり
おらららららららららら
わらわらわらわらわらわら
あらあらあらあらあら
がらがらがらがらがらがら
はらはらはらはらはらはら
ららららららららららら

○此のころ平将入まゝの世とて宮は平家朝臣の御
あはれかゝり給ひ

○宮のとき細兵の宮也

○じうじいし世抄のなかのうし時とて也

○ととひ 河 息荒 豊丸 取蛇尾 在子

○ゆらこころよ 万水 兵刃の我のころよ也

○このころの細二年はうらうらとての好く此後毎
大臣の室より好くあり 或抄ま塚と云分りて
○このころて年月も 細は氏四十二より四十五までの
事此中よありし

○十八年は花冷泉院は治承廿八歳の時とて 多禰有
そのあつた年と在位の初より治承甲午六歳までハ
十八年よあり也十八年在位は清和天皇の例也
○世中より 孟 冷泉院の心也 継帝のころ
も也

あはれかゝり給ひ
宮のとき細兵の宮也
じうじいし世抄のなかのうし時とて也
ととひ 河 息荒 豊丸 取蛇尾 在子
ゆらこころよ 万水 兵刃の我のころよ也

このころの細二年はうらうらとての好く此後毎
大臣の室より好くあり 或抄ま塚と云分りて
このころて年月も 細は氏四十二より四十五までの
事此中よありし
十八年は花冷泉院は治承廿八歳の時とて 多禰有
そのあつた年と在位の初より治承甲午六歳までハ
十八年よあり也十八年在位は清和天皇の例也
世中より 孟 冷泉院の心也 継帝のころ
も也

いづりのおれれ 弄ひりし神の心よきとて
ひらの山へいよるなり 世奇清輔袋草子よ又時
の奇とありしりめやまりて女時と云せり又世物
語大やうとて書あやまりをり 因吹我う奇を生
忠見奇也須磨巻よ行平と云るも誤りこれと
讀ま今も物語の分を以て行平と入り取詮此物語
の定も野相公れ奇と心得て不苦と也 禪園中
つせりの世と云るなり 花説同之説多うるは
て弄致をのむり花委 細松の上の霜のゆくと
まると云ての奇より一時くやと云せり也
○神へ乃奇 明石荒奇心明也

○中つきの君 細堂上の母房

○いづりく奇 河祝子

細是はまの奇とうきと云り
巴城つらと云るは神の納交と云る也

○つとく 細草子地也

○松の千とせり 孟皆奇ハナとせきとの
ちれは書よ不及と面白書也

○もくまと 河神楽譜日本奇 何と云と云れハ
とつう天照やひらめれ神と云るなり
未哥 いづりて何と云とて天照やひらめれ神を
云るなり

○つとく 河 神床面とへ寒と顔色と或云類
と云合て並居と云也

○花うらと 神床と云る人乃面也
○もくまと 河 庭燿 四声字菴云燿カ照及和名
途波比 毛詩有庭燿篇

○まんごいと 河 神床有千歳早哥 本方せん
と云くや十年のせんやま方まんごいと云
よちつせの万歳也

○みせの末 孟 孫氏のせれ末 曼昌いづり
地也

のひらりゆらうらうらと云る
わんのせりのゆらうらと云る
ちみりゆらうらと云る
のらうらゆらうらと云る
ふらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

ゆらうらゆらうらと云る

三十三

三十三

○物語の地より評せり世にひうのあらんはえり
○細世入道のやうに世とまじり

○これとありて河長恨哥傳云男不封假世作
妃者世却而為門上楣其人心羨慕世

○めてあやん 孟欺也
巴欺 俗諺よあやむと云詞也

○とくうううの或世よ目と云時よ

○入道のいふハ花朱雀院の所也

○らられりとも 或世朱雀院は皇子の位代れ
とも政事ホともいれぬ也
○春秋の行業ハ河春秋行業 朝觀也
礼記云春見云朝秋見云觀 下略

○ひめやの 或世女三宮也

○世院とハ細ほ氏とハ大政のりともと云
とくつとあへと内ト也

○二品ハ花 禄令一品親王封八百位田八十町二品
六百位田六十町三品四百五十町内親王封減半
位田減三分一 今案二品内親王ハ封三百位田二
十町也河海ハ季人久ちるさる也
弄回云内封封戸の戸といふハいふやうにや二勤
戸ハ民戸也千戸万戸と云ハ民戸と云はる心也

とくうううの或世よ目と云時よ
あやむと云詞也
孟欺也
俗諺よあやむと云詞也
河長恨哥傳云男不封假世作
妃者世却而為門上楣其人心羨慕世
細世入道のやうに世とまじり
物語の地より評せり世にひうのあらんはえり

入道のいふハ花朱雀院の所也
らられりとも 或世朱雀院は皇子の位代れ
とも政事ホともいれぬ也
春秋の行業ハ河春秋行業 朝觀也
礼記云春見云朝秋見云觀 下略
ひめやの 或世女三宮也
世院とハ細ほ氏とハ大政のりともと云
とくつとあへと内ト也
二品ハ花 禄令一品親王封八百位田八十町二品
六百位田六十町三品四百五十町内親王封減半
位田減三分一 今案二品内親王ハ封三百位田二
十町也河海ハ季人久ちるさる也
弄回云内封封戸の戸といふハいふやうにや二勤
戸ハ民戸也千戸万戸と云ハ民戸と云はる心也

ろくを封戸とてし也

○うとうれ 細ほ氏とての奉らう也

○その内心とて 細籠六年とてをうらふ也

○うんせと 或極とわん也

○ゆきまの 孟後は籠愛とありき

○世とて 世とて世とて世とて

○この内心とて 細世三宮の心也
○うらふとて 細世三宮の心也
○うらふとて 細世三宮の心也

○うらふとて 細世三宮と世とて世とて
○うらふとて 細世三宮と世とて世とて
○うらふとて 細世三宮と世とて世とて

○うらふとて 世世世上の心也

○春宮の内とて 弄明石中宮腹の世一宮也
細後董大將の心とて也

○うらふとて 世世世上の心也

○うらふとて 或極 明石中宮腹の心とて
世世上の慈愛とて也

○其の内とて 弄花散里夕霧大將の心とて
つと也

ろくを封戸とてし也
うとうれ 細ほ氏とての奉らう也
その内心とて 細籠六年とてをうらふ也
うんせと 或極とわん也
ゆきまの 孟後は籠愛とありき
世とて 世とて世とて世とて
この内心とて 細世三宮の心也
うらふとて 細世三宮の心也
うらふとて 細世三宮の心也
うらふとて 細世三宮と世とて世とて
うらふとて 細世三宮と世とて世とて
うらふとて 細世三宮と世とて世とて
うらふとて 世世世上の心也
春宮の内とて 弄明石中宮腹の世一宮也
細後董大將の心とて也
うらふとて 世世世上の心也
うらふとて 或極 明石中宮腹の心とて
世世上の慈愛とて也
其の内とて 弄花散里夕霧大將の心とて
つと也

ろくを封戸とてし也
うとうれ 細ほ氏とての奉らう也
その内心とて 細籠六年とてをうらふ也
うんせと 或極とわん也
ゆきまの 孟後は籠愛とありき
世とて 世とて世とて世とて
この内心とて 細世三宮の心也
うらふとて 細世三宮の心也
うらふとて 細世三宮の心也
うらふとて 細世三宮と世とて世とて
うらふとて 細世三宮と世とて世とて
うらふとて 細世三宮と世とて世とて
うらふとて 世世世上の心也
春宮の内とて 弄明石中宮腹の世一宮也
細後董大將の心とて也
うらふとて 世世世上の心也
うらふとて 或極 明石中宮腹の心とて
世世上の慈愛とて也
其の内とて 弄花散里夕霧大將の心とて
つと也

○内侍のよき 河曲侍 惟光朝臣女
支柳 後よ落葉宮の御子分うして白宮の下方よ成
御六君也

○御子の君し 万水 源氏と夕霧の六君といひ
り御子也

○まゝくまひつこし 細 明石中宮の御腹夕霧の
御子ありしはれハ未ハ整昌あり也

○これとらうく尺 支柳 源氏御孫とらと愛
御てうくさくおとく

○右の大よの 弄 髯里也

○今ハ小方と 万水 毛くし昔の源氏ハ下心
くるれ御もや六条院(ま)り御も雲上とも中
よとらうくさくおとくハ源氏のまはらう

○姫宮のこそ 細 女三宮也

○女の君ハ 細 中宮ハおとくハ御も心やせし
あて今ハ此女三宮の御もとれは源氏ハ心とつま

○此宮とハ 孟 源氏の女三宮とあはれ花鳥よ女
一宮とあり誤也

さうやうしおのふさふさ
のしげのふさふさ
ていづつおのふさふさ
さうやうもおのふさふさ
まけしおのふさふさ
はりおのふさふさ
しづかおのふさふさ
るるおのふさふさ
おのふさふさ
けりおのふさふさ
まはらう

さうやうしおのふさふさ
のしげのふさふさ
ていづつおのふさふさ
さうやうもおのふさふさ
まけしおのふさふさ
はりおのふさふさ
しづかおのふさふさ
るるおのふさふさ
おのふさふさ
けりおのふさふさ
まはらう

○むぎよせちうく 弄終ちうこ心也

○そいめんらん 孟女三宮(見卷わうごご心也)

○そいろうんのろうし 或抄 孟女三宮のわうごご心也
のろうのされに也あひてしうりあうし

○そいろうんのろうし 或抄 孟女三宮のわうごご心也
のろうのされに也あひてしうりあうし

○何まごやてう 孟る此つめてうてハ三宮
と朱雀院へ尺せまう(さうと信成の心也)
○此うひうろくん 細今年朱雀院の四年四十
九也明年五十は満了ア信成ハ今年四十六歳也
○ころ茶あし 細 内賀也此卷の名也

○いりおれまうき 細世の常れ内賀よまうりう
或抄 内出家の内賀るれハ法服内精選物の内用
意

○内心ちうひ 河心知心調 或抄 心つひと云ふ同
也 抄 精選物ハ別而心つひちうり心入とも也

すいん人のしほはむきふせ
りしむりかららしてあ
らんがうりしむりふあふ
しうりしむりおひしむり
をいんあひしむりむき
まひしむりしむりしむり
しむりしむりしむりしむり
おむりしむりしむりしむり
かからむりしむりしむり
人きりしむりしむりしむり
まらむりしむりしむりしむり

しむりしむりしむりしむり
おむりしむりしむりしむり
かからむりしむりしむり
人きりしむりしむりしむり
まらむりしむりしむりしむり
すいん人のしほはむきふせ
りしむりかららしてあ
らんがうりしむりふあふ
しうりしむりおひしむり
をいんあひしむりむき
まひしむりしむりしむり
しむりしむりしむりしむり
おむりしむりしむりしむり
かからむりしむりしむり
人きりしむりしむりしむり
まらむりしむりしむりしむり

○卯のくまら 河 由按 手仕也
弄ゆハゆク也のくまらハと也

○このくまらのくまハ孟嘗上ノ源氏のくまら
廿三宮此四方ハくまらありて琴とくまらハ也

○女の君もと 細 明石サ也

くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん

○内子ニとよ 弄 明石サ也のくま也又もくまら共
部卿官と懐妊あり也

○五月ハより 河 宮サ懐妊者散斎之前退避者
目事者祭日以前退出宿盧不得上殿其三月九
月潔斎預前退出官外 物忌

○土月より 細 一本土月とあり土月土月の神今
食斎斎の目され也又土月ハ神事多自也西本
共用之

○ささく我よ 孟 明石サ也

くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん
くまら へん へん へん へん へん へん へん へん へん へん

○冬此よの月 河 枕草子ハ冷物とくまの月夜
とあり心也 細 人のあてくまの月夜ハ冷物と
ハ多評とあり也 世按 源氏のあて也

○世よりの物の一或抄地下の床へさるへ高の家
といふ堂上此床の家さるへ

○細随分より中へあつて
細随分より中へあつて

○此のうら此細當代の物に器用するへ悔説有
て正解するへ

○此のうら此細當代の物に器用するへ悔説有
て正解するへ

○此のうら此細當代の物に器用するへ悔説有
て正解するへ

○此のうら此細當代の物に器用するへ悔説有
て正解するへ

○廿二とより 細今年廿二とよりへ
此年十四歳と云ふへ

○院うと 或抄朱萑院也已下
教訓也

Handwritten cursive text on the right page of the manuscript, consisting of approximately 15 lines of vertical script.

Handwritten cursive text on the left page of the manuscript, consisting of approximately 15 lines of vertical script.

○まはらうろ 孟 孫氏のやうなる人なりて三
宮のまはらうろ也

○正月廿日ハナリ 花まきくハ十九日也ハ待の月
下ハなまなり

○月十八 花 朱 雀院の五才 禰也
細 二月よりなり

○まらめりて 細 一ハ

○まててく 一 并 三宮の四方ハ世上一ハなり也

○まらめりて 細 三宮の四方ハ世上一ハなり也

○まらめりて 細 三宮の四方ハ世上一ハなり也
孟 孟と色ハ薄紫也

Handwritten cursive text in two columns, likely a transcription of the text above. The right column contains approximately 15 lines of text, and the left column contains approximately 15 lines of text. The characters are highly stylized and difficult to read without a key.

○まからしめて 孟正躰に居る 緩急なれは也

○まきまはくろ 或はひびくまを引くまをさす也

○まきまはくろよりし 細まへし神さひつらとひ
こま又うしろありう

○五月まろ花橋の河 五葉より花はるる花
はるるのまろ枝よ霜をまろとまろは
花は五月まろ花橋のまろまろ昔の人の神の
まろまろ 細橋は五月は咲のまろまろまろ
まろ山かまろまろまろまろの奇は四月也

○まろまろまろ 万水 篠原中よりまろ也

○まろまろまろまろ 細野分のおれも也

○宮とみ今まろの 孟廿三宮と夕霧の心也

○まろまろまろ 河 緩也

○院はまろまろ 弄 朱雀院の事
孟廿三宮と夕霧へまろまろ

Handwritten cursive text in Japanese, likely a transcription of the text above. The text is written in a fluid, connected style across two pages. The right page contains approximately 15 lines of text, and the left page contains approximately 15 lines of text. The characters are dark and clearly legible against the light background of the paper.

○春はさるゝ細笛の音をきこむるは春まじ
へこと也夕霞か八當座とやめしやう

○いそぐ巴母心の句とさうし

○廿八春と河毛詩 廿感陽氣春思男男感
陰氣秋思女

○りのとのりや或按 琴笛のやうさ春と

○いふ此さるゝ弄 浮氏の語也

孟夕露より一は也春秋の勝劣の事也
河拾遺いふよりいひてさるゝ春とさるゝ
いふこといふこと

○物のちうへうのりの河曲 呂ハ春のちうへ律ハ秋の
ちうへと云を 花 本ハ律呂とてハ律ハ陽正也呂ハ陰
助也然共催馬系ハ呂律とてハ律と次よりさるゝ也
弄春とさるゝと浮氏の語也向云物のちうへ
の物とさるゝと律とてハつこの物とてハつ調曲をさ
催馬系のちうへとてハつ呂律と律と次よりさるゝ也
一動催馬系ハ呂律と付たり向云本朝の伶倫の
相傳も呂律と陽陰と用來と催馬系も此分るゝ
と若一劫唐ハハ律呂と云ハ陽と云ハ陰と云
○いふこと今 細是より當世れりさるゝは浮氏の
さるゝの語也

○そのことと弄人よりさるゝとさるゝ
上手とさるゝのひとさるゝとさるゝ
細師見といふこと

○あう 巴母 世遊と云心非樂

いふこといふこと
さるゝの語也
催馬系のちうへとてハつ呂律と律と次よりさるゝ也
一動催馬系ハ呂律と付たり向云本朝の伶倫の
相傳も呂律と陽陰と用來と催馬系も此分るゝ
と若一劫唐ハハ律呂と云ハ陽と云ハ陰と云
○いふこと今 細是より當世れりさるゝは浮氏の
さるゝの語也

いふこといふこと
さるゝの語也
催馬系のちうへとてハつ呂律と律と次よりさるゝ也
一動催馬系ハ呂律と付たり向云本朝の伶倫の
相傳も呂律と陽陰と用來と催馬系も此分るゝ
と若一劫唐ハハ律呂と云ハ陽と云ハ陰と云
○いふこと今 細是より當世れりさるゝは浮氏の
さるゝの語也

○うらなふと 弄るものも也

○うらなふと 細々良上葵上薄雲も

○うらなふと 或秋 浮氏の色をいふも

○それよきてや 細福祿壽とてうらなふ
うらなふ也 孟不如意ふれいふも
うらなふ也

○君のゆゑなり 孟 世の上の物なり

○后とて 弄 如人へ

○あやろまゝのぬ 孟 世の上の物とてほ氏のぬ也

○あやろまゝのぬ 孟 世の上の物とてほ氏のぬ也

Handwritten cursive text in two columns, likely representing the phonetic transcription of the Japanese text on the opposite page. The characters are written in a fluid, connected style typical of the Edo period.

○そのうへに細きやうのこも

○世々やの弄 廿三宮の事

○それよつぎそへ孟たればよつぎそへ廿三宮の事
世々の事やうんかよれば別而は氏の事

○それよつぎの弄 自らぬるるるるるる

○のぬるるる 細 世々の細

○そのうへに細きやうのこも

孟人れ目ふに心やまをたやうなれとてそのうへの上を
いりやうとておとすへん 色板 活版のうへをか
よのぢひれ絶なり祈と成て長命とて如世とて物
とてひれとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
又世々の細也

○今年とてく 弄 廿七の世の大厄也

○そのうへに細きやうのこも

○それよつぎの弄 活版の細也
孟一の置字也活版の活也世々の出家の
いとよの事也
○そのうへに細きやうのこも 或板 世々の出家とて後ハ活版の

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of the printed text above. The text is written in a fluid, connected script across multiple lines on both pages.

活版

廿六

○此身もぬるして 河小所集人たれぬまらふ人よ
わてぬふらふ人あつてありあゆみか

○世のゆきより 万水 明石の世より 雲上へもとれ
ありしよりくるやみゆきより 世の世より 世の世より
ありしよりくるやみゆきより 世の世より 世の世より

○この世の世より 或坂 河氏詞

○この世の世より 盃 大法の世より 世の世より
の世の世より 細 三十七歳の世より

○花にれは 河氏の世より 也

○世の世より 或坂 河氏詞

○世の世より 或坂 河氏詞

かゝる世の世より 河小所集人たれぬまらふ人よ
わてぬふらふ人あつてありあゆみか
○世のゆきより 万水 明石の世より 雲上へもとれ
ありしよりくるやみゆきより 世の世より 世の世より
ありしよりくるやみゆきより 世の世より 世の世より
○この世の世より 盃 大法の世より 世の世より
の世の世より 細 三十七歳の世より
○花にれは 河氏の世より 也
○世の世より 或坂 河氏詞
○世の世より 或坂 河氏詞

かゝる世の世より 河小所集人たれぬまらふ人よ
わてぬふらふ人あつてありあゆみか
○世のゆきより 万水 明石の世より 雲上へもとれ
ありしよりくるやみゆきより 世の世より 世の世より
ありしよりくるやみゆきより 世の世より 世の世より
○この世の世より 盃 大法の世より 世の世より
の世の世より 細 三十七歳の世より
○花にれは 河氏の世より 也
○世の世より 或坂 河氏詞
○世の世より 或坂 河氏詞

○女の君と 孟明石の中宮也

○物のまゝく 細懐妊也

○くやまのり 也 扱 廿四内へまのりぬと業上の詞

○まろ宮の 弄 朋石中宮腹の二宮と又白宮に秘儀有せ二宮ぬるる人し

○ゆいしつか 弄 浮氏語 細人くのみ也

○とくしつか 弄 大なるまのりし也

○とくしつか 細業上の徳わつ心抜とひわりの道 河孝経至徳要道篇小取至小得福大取至大得至 下略河委

○とくしつか 河 老子経曰 尋之勝剛 古尋齒對 天下莫不知 知尋致者久長 齒強者折傷也

○とくしつか 或 善人よの佛神の感應とわつ

Handwritten Japanese text in cursive style, likely a transcription of the printed text above. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. It appears to be a copy of the same content found in the printed text on the page above, written in a more fluid, calligraphic hand.

よみ 河夜居

○又とより 孟ふれいありと病相也

○かとりより 或坂 保氏の心也

Handwritten text in cursive script, likely a transcription of the text on the left page.

○またとよまつのころ 細岬 下 柏木のころ也 出圃ハ
茶議よしてありしころなり

○いし時の人 弄時より入也

○あしより 細 廿三宮のころ也

○あつみの二宮と弄 廿三のころ宮也 落葉宮也

Handwritten text in cursive script, likely a transcription of the text on the right page.

のくろくし丸 河深着 日本紀

細心と制しゆ也

細實事か

孟世三官の世

或抄 柏本の細

細宮とあし
孟世の世
或抄 一而の心と

孟柏本心
細心

Handwritten text in cursive script, likely a transcription of the text above. The text is written in a dense, flowing style across multiple lines on both pages.

このあやしきありし 或按 まづの時よりありし
もといひし也

○あやしきありし 或按 廿三宮の也

○院より今ハ 孟廿三宮の也といふは
てつあらしき人なり

○いふは 水 柏木の也

○いふは 水 柏木の也 可下官持衣袖と娘と扶媛
建初庵

○いふは 水 柏木の也

○いふは 水 柏木の也 孟又つて
いふは 水 柏木の也

○いふは 水 柏木の也 或按 廿三宮の也

○いふは 水 柏木の也 或按 柏木祠

Handwritten text in a cursive style, likely representing the same content as the printed text above. The text is written in a fluid, connected script across multiple lines on both pages.

○物やちとせんと弄世とをいふ

○今一とく 弄世息家のついでに
業といふ 或は思思あふまう
○い人の或は思愛と

○いよまきと 或はじりの執着

○いじり 細 養上の時上物の氣

○ゆきれハ 或は養上の時此物の氣
○いよまきと 或は思思あふまう

○いよまきと 或は思思あふまう

○いよまきと 或は思思あふまう

○いよまきと 或は思思あふまう

Handwritten cursive text in Japanese, likely a transcription of the text above. The text is written in a fluid, connected style across multiple lines on both pages.

○うゝと入るゝ孟 可信也

○我ガこゝ奇 弄 物の氣れ奇也
ほ氏ハちう入るゝと
細我ガこゝ生と入るゝと

○物くららるる 弄 葵巻こと物のをれららるる
るあり

○ののてせしと 細 ほ氏の物とせしとせしと
○中官のゆゑ 細 物の氣れりて秋好中官也

○道しと 弄 生前死後
或抄生とゆゑハ子のののの

○心のちうらん 世 被 枕心也一念の悪念如餅とく

○その世は 孟 今上はありし時不足はあり
ありし時ありしがと根とありしと
物とありしと無曲と

○その世は 孟 今上はありし時不足はあり
ありし時ありしがと根とありしと
物とありしと無曲と

○その世は 孟 今上はありし時不足はあり
ありし時ありしがと根とありしと
物とありしと無曲と

○その世は 孟 今上はありし時不足はあり
ありし時ありしがと根とありしと
物とありしと無曲と

○くろいあつと 細雲上の傾滅のものとひあつ也
○あまのうき世は河のうららうららそめとて花
わけて草花とてのうきれいられはとていひ
りてうきれもあまのうき世はスーとてい

○の院へ 或掾ニ条院也

○大いこの 或掾 世のあつとひのうき
との所也

○式部卿官し 細雲上の父也

○大將の君 弄 夕霧也

○いさめ 弄 柏木語

○まじりて 孟人のトゆへ難信と

○いさめくちて 弄 夕霧語

○心ちつじ 或掾 心鎮也

くろいあつと 細雲上の傾滅のものとひあつ也
あまのうき世は河のうららうららそめとて花
わけて草花とてのうきれいられはとていひ
りてうきれもあまのうき世はスーとてい
の院へ 或掾ニ条院也
大いこの 或掾 世のあつとひのうき
との所也
式部卿官し 細雲上の父也
大將の君 弄 夕霧也
いさめ 弄 柏木語
まじりて 孟人のトゆへ難信と
いさめくちて 弄 夕霧語
心ちつじ 或掾 心鎮也

○しらあやしい 孟 継母のよき夕霧渡とあや
ハ不審と我思ふしは柏木のよき
○この君れ 花 夕霧のよき也

○くねくね 細 ほ氏のよき也

○まろまろの 或 母ほ氏のよき也

○まろまろと 孟 ほ氏のよき也

○ととととと 万水 母のよき也
と別而のよきとと 対面はあつと也

○うやうやのうやうや 何 牢籠
花 牢籠はうやうやのうやうや也
細 花鳥説如何と不自由心する人し前より
とあやうやうやうやのうやうやと

○まろまろまろまろ 或 母 腹黒のよき也
或 柏木の心と地と

○うらうらと 細 ほ氏の心也 中息不うらうらの
まろまろのうらうらと

或 母 葵よれ時

Handwritten musical notation in a cursive style, consisting of approximately 15 lines of notes and rests across both pages.

今ハ死スルハ鬼鬼ヲモテ成テおぼし

○中宮と 孟秋好のまを物くほ氏の

○いひとゆをハサの河所有三千界男子諸悩煩合集爲一人女人爲業障女人地獄使能断佛種子外面似菩薩内心如夜叉 涅槃經 細サハ業障也

○人しとるし 孟 孟マ上ハ息不の

○いんくめりー 或抄 世に出家の

五ついとうり 或抄 五戒者殺生偷盜邪淫等語 飲酒也

○いじりねとれ 河 五戒龍王經 一日一夜間持三淨五戒人生三千天中取守護又持五戒人廿五神王被護又以清淨心合掌不生他念人者命終時生日摩尼天 下略 人しとる 孟 孟氏也

○いんくめりー 或抄 孟氏のこと

Handwritten text in cursive script, likely a transcription of the printed text above. The text is written in a dense, flowing style across the lower half of both pages.

五月雨の時に病人をた
すれくすれくすれ

五月雨の時に病人をた
すれくすれくすれ

五月雨の時に病人をた
すれくすれくすれ

五月雨の時に病人をた
すれくすれくすれ

五月雨の時に病人をた
すれくすれくすれ

五月雨の時に病人をた
すれくすれくすれ

五月雨の時に病人をた
すれくすれくすれ

五月雨の時に病人をた
すれくすれくすれ

Handwritten cursive text in a single column, likely a transcription of the text above. The characters are highly stylized and difficult to decipher.

五月雨

五月雨

○いしむちんきんまね 或抄りていしむちん(三)

○六月より 孟堂上の女本腹也

○ちとやうく 弄るゝあやうき也

○六条院は、弄 以前の初もと堂上病と告
し時はころ好也

○あやうきし 或抄 柏木の近づくまじりしと

○いしむちんきんまね 細廿三宮懐妊也

○いしむちんきんまね 或抄 懐妊のまね也

○いしむちんきんまね 細 柏木也

○夢のやうよ 弄 柏木廿三宮よまもまじりし
わんし

○院とていしむちん 孟 活氏と廿三宮の也

○いしむちんきんまね 巴 抄 柏木と活氏と

○いしむちんきんまね 細 柏木の華也

いしむちんきんまね 或抄りていしむちん(三)
六月より 孟堂上の女本腹也
ちとやうく 弄るゝあやうき也
六条院は、弄 以前の初もと堂上病と告
し時はころ好也
あやうきし 或抄 柏木の近づくまじりしと
いしむちんきんまね 細廿三宮懐妊也
いしむちんきんまね 或抄 懐妊のまね也
いしむちんきんまね 細 柏木也
夢のやうよ 弄 柏木廿三宮よまもまじりし
わんし
院とていしむちん 孟 活氏と廿三宮の也
いしむちんきんまね 巴 抄 柏木と活氏と
いしむちんきんまね 細 柏木の華也

いしむちんきんまね 或抄りていしむちん(三)
六月より 孟堂上の女本腹也
ちとやうく 弄るゝあやうき也
六条院は、弄 以前の初もと堂上病と告
し時はころ好也
あやうきし 或抄 柏木の近づくまじりしと
いしむちんきんまね 細廿三宮懐妊也
いしむちんきんまね 或抄 懐妊のまね也
いしむちんきんまね 細 柏木也
夢のやうよ 弄 柏木廿三宮よまもまじりし
わんし
院とていしむちん 孟 活氏と廿三宮の也
いしむちんきんまね 巴 抄 柏木と活氏と
いしむちんきんまね 細 柏木の華也

○細川氏はあつたての御所
御目うつしはいととく

○細川三宮懐姫の御所也

○弄懐姫といふは

院の御所也弄三宮懐姫の御所也

恨也初の不審して勿解す

或秋一本よといふは

河詢ヲ多 或囁

細六条院(源氏)の御所也

甘君ハ 細紫上也

○河小青 佐青 万葉人玉のまが
弄は

○河蛇

○細二条院也

○或秋 紫上

Handwritten Japanese text in a cursive style, likely a transcription of the text on the left page. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. It appears to be a copy of the same content found on the left page, including the names of various courtiers and their residences.

○このくろ 細 柏木也

○細く又くろをきく 孟 奉て也 或抄 明て

○このくろはつとよ 弁 保良の所へんともいふ也
抄

○このくろ文の或抄 中侍従の柏木の文と云

○てきりとも 巴抄 小侍従の心也

○えやハ 孟 廿三宮也

○あさひとも 細 保良の心也 我身はえりともいふ
くろくともいふ

○まねハよ 或抄 保良の心也 心もいふ
案のこくともいふ 心也

○坐好ひかれハ 細 保良の二茶院へ坐好也

Handwritten cursive text in Japanese, likely a transcription of the entries above. The text is written in a fluid, connected style across multiple lines on both pages.

○あつちのちよよ 弁 別也
或換 廿三宮のいすんと廿房より退る也
○このふたりのハ 或換 小侍従り也
○まいぬんの 孟 源氏のゆ也

○しういもの 細 小侍従り也
○つらつらハ 細 小侍従り也

○はらうれいんを 弄 小侍従り也
○つはらひー 或換 源氏のいすんと退る也
○あつちのちよよ

○ひんま 細 廿三宮の初

○つらつらハ 或換 孟 源氏のゆ也
○あつちのちよよ 細 小侍従り也
○このふたりのハ 細 拍木也
○まいぬんの 或換 畏也

あつちのちよよ 弁 別也
このふたりのハ 或換 小侍従り也
まいぬんの 孟 源氏のゆ也
しういもの 細 小侍従り也
つらつらハ 細 小侍従り也
はらうれいんを 弄 小侍従り也
つはらひー 或換 源氏のいすんと退る也
あつちのちよよ
ひんま 細 廿三宮の初
つらつらハ 或換 孟 源氏のゆ也
あつちのちよよ 細 小侍従り也
このふたりのハ 細 拍木也
まいぬんの 或換 畏也

○細草子地也主君よみよみ物の
○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

Handwritten cursive text on the right page of the left spread, consisting of approximately 15 lines of dense, flowing characters.

Handwritten cursive text on the left page of the left spread, consisting of approximately 15 lines of dense, flowing characters.

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○今ハ

○かみりまへ 孟 廿三宮の御名
ひてむらひのひらうとて 孫氏のちの御名
好むハ勝也とてわけての心也
或按 まへくはひらうて也

○此の御名 或按 孫氏の御名也

○かみりまへ 細 廿三宮也
或按 心の鬼あられいろ外よりとて也

○かみりまへ 孟 廿三宮の御名
よらうて 不意の御名也
○かみりまへ 孟 廿三宮の御名
えらうて 不意の御名也

○廿四ノ 弄 明 廿四宮の御名

○かみりまへ 河 廿四宮の御名
ねむりて 御名也
或按 あらうて 御名也

○かみりまへ 巴 廿四宮の御名
りひるやま 御名也

○右の御名のわかれ 花 廿下の一候ハ
ひまらうの大將の御名也

Handwritten text in a cursive style, likely a transcription of the entries on the left page. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. It appears to be a phonetic or shorthand representation of the names and descriptions provided in the printed text on the left.

○うらうらとて五世三宮のまよひて勝目
夜のまよひとていふなり也

○のほ心よとて或抄花鳥三宮のまよひとて
いふとてあやとては是は三宮や勝目夜のまよひ
とていふなり也

○今もんとては巴撫 出出家のまよひとては
とてせまうりせしむる也

○あまのまよひとて哥 ほ成也 弄勝目夜のまよひ
とてはほ成のまよひとていふなり也
とてはあまのまよひとていふなり

○まよひとて 或抄 いまの文の初也

○あまのまよひとて 巴撫 ほ成と思召捨るなり也

○あまのまよひとて 或抄 廻而まよひとては
とてはあまのまよひとていふなり

○あまのまよひとて 細 朱雀院のまよひ
のまよひとていふなり

○あまのまよひとて 細 朱雀院のまよひ
のまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

あまのまよひとていふなり

○さいめんく 弄 槿 齋院尼よりうけつた
くまそり

○ゆくめいなる 弄 槿の齋院はるせゆ
ゆきまき 槿の解也

○ゆきまき 槿の解也
細さかんやとの貞女はるり

○ゆきまき 槿の解也
○ゆきまき 槿の解也

○ゆきまき 槿の解也

○ゆきまき 槿の解也
巴抄 弄花相違 女子又男子のわきま
よめらひのむす也

○ゆきまき 槿の解也
○ゆきまき 槿の解也

○若宮と 弄 今上の女二宮はる
細紫上のやういふ也

○女は 孟 明石女也

Handwritten Japanese text in cursive style, likely a transcription of the entries above. The text is written in a fluid, connected script across multiple lines on both pages.

○人々をば世にぞのりて平人の心もなほ
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて
○くろくしき 花世上の詞

○いづる人とも、世に 娘也命もとていひて
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて
○くろくしき 花世上の詞

○いづる人とも、世に 娘也命もとていひて
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて
○くろくしき 花世上の詞

○人の君よ 或秘 ほ氏の句
孟 跡目夜 ほ氏より 装束とてまのつせ
○いづる人とも、世に 娘也命もとていひて
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて
○くろくしき 花世上の詞

○いづる人とも、世に 娘也命もとていひて
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて
○くろくしき 花世上の詞

花散里

花散里の君よ 或秘 ほ氏の句
孟 跡目夜 ほ氏より 装束とてまのつせ

いづる人とも、世に 娘也命もとていひて
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて

いづる人とも、世に 娘也命もとていひて
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて

いづる人とも、世に 娘也命もとていひて
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて

いづる人とも、世に 娘也命もとていひて
平人の後尺の心やとて宮中の後見も
大まか官と平人とていひておほく
孟九人の嫁娶はやとていひて

花散里

かゝる西月をいふ人ありはるるの
あはれも世世 不慮あること

○ころすしすより 細誰人う朱雀院へ
○ころひて 孟 廿三宮の躰也

○ころひるる 或柳 是よりほ氏のね

○今夕のりえ 細 又いふやうなるも有りと

○入乃 弄 朱雀院の也
○んよむくし 弄 廿三宮の心也

○ころすしすより 花 十人の
或柳 弄花よハ朱雀院とあり
柏本のると下よせたる初也

○ころすしすより 花 弄しすより
細 年よりると廿三宮の足り

あはれも世世 不慮あること
細誰人う朱雀院へ
孟 廿三宮の躰也
是よりほ氏のね
又いふやうなるも有りと
朱雀院の也
廿三宮の心也
花 十人の
弄花よハ朱雀院とあり
下よせたる初也
花 弄しすより
廿三宮の足り

あはれも世世 不慮あること
細誰人う朱雀院へ
孟 廿三宮の躰也
是よりほ氏のね
又いふやうなるも有りと
朱雀院の也
廿三宮の心也
花 十人の
弄花よハ朱雀院とあり
下よせたる初也
花 弄しすより
廿三宮の足り

○尺このゆかし 弄 廿三宮の院に賀の事也
或按 四十賀よ 四十寺 五十賀よ 五十寺 法
事あり

○所さく 河月 或按 次

○年もせり 孟 年迫也

○このゆかし 細院の出家の事也
よ

○家よあひおる 弄 浮城の子孫一家の事

○このゆかし 或按 舞樂の事
○このゆかし 或按 調樂也
○このゆかし 拍子

○このゆかし 孟 年迫也

○月より 細 拍木の返事也 堂上女三言
さしのゆかし也

○このゆかし 花く 瘰癧病脚病の事
病とゆかし也 血氣よく

このゆかし 舞樂の事
このゆかし 調樂也
このゆかし 拍子
このゆかし 孟 年迫也
このゆかし 細 拍木の返事也
このゆかし 堂上女三言
このゆかし 花く 瘰癧病脚病の事
このゆかし 血氣よく

このゆかし 舞樂の事
このゆかし 調樂也
このゆかし 拍子
このゆかし 孟 年迫也
このゆかし 細 拍木の返事也
このゆかし 堂上女三言
このゆかし 花く 瘰癧病脚病の事
このゆかし 血氣よく

河らや物語十五 中納言 尾藏 まりのりて
りゅうくひやうのりてあり

○院の四いひより 孟 朱雀院五十也

○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
て切のりてあり 致仕まのりてあり
河古久孝經云七十老致仕其所仕之車置諸廟永
使子孫監而則正而立身之終其要然也
○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
とて親ありてありよりなるりてあり
○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり

○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
曹來由 自氏文集
○まつて 也 賀 朱雀院へ柏木まのりてあり

○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
岡居とあり門のりてあり

○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
細 大略のりてあり

しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
岡居とあり門のりてあり
細 大略のりてあり
曹來由 自氏文集
○まつて 也 賀 朱雀院へ柏木まのりてあり
○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
とて親ありてありよりなるりてあり
○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
河らや物語十五 中納言 尾藏 まりのりて
りゅうくひやうのりてあり

しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
岡居とあり門のりてあり
細 大略のりてあり
曹來由 自氏文集
○まつて 也 賀 朱雀院へ柏木まのりてあり
○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
とて親ありてありよりなるりてあり
○しゅうほうとを 孟 賀の賀のりてあり
河らや物語十五 中納言 尾藏 まりのりて
りゅうくひやうのりてあり

○こゝろをわきて 孟婆氏のあまを 柏木のよそに立遊

○しんごのあつく 弄 花散里のよそ也

○あはるひくらく 弄 柏木のあはるひくらく人など

○せよ 此乃らひ 巴柳 柏木分別あると

○あゝあゝ 或抄 世に上明石共のよそに

○この花賀れ日ハ 花 養平七年陽成院七十賀舞童 五人眼赤白椽袍蒲陶漆下襲 或抄 賀の當日れり也

○きよハ青のりよ 河 青色麴塵也 菖蒲車 或抄 試樂の目れり也

○く人三十人 河 三十人 誰得聽 含元殿角 管絃聲

○せやくり 河 仙遊霞 大食調曲 拍子千舞舞

○春のさゆり 河 古今冬さゆり 春れさゆりのさゆり きれハ中塩よりそ花ハらさゆり さゆりさゆり 多し梅の花をこそ我もあゆみさゆりさゆり

わたりとていささか
さうさうさうさう
さうさうさうさう
あつとつとつとつ
はつとつとつとつ
くさつとつとつとつ
おつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ

あつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ
さつとつとつとつ

○おじまの君も手踊り舞の舞とくみはせ

○おたまりの舞の牛と
○或は師匠のこゝろ外は

○式も官もおじまのこと 或は中納言の息也

○おろの院 弄 俗成也

○おろろろのいよ 或は俗成の句也

○おひの道は河万葉のこゝろ酒

のておひの道は河万葉のこゝろ酒

同はよめをこゝろ酒のこゝろ酒

おろろろろろ

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おじまの君も手踊り舞の舞とくみはせ

おたまりの舞の牛と
或は師匠のこゝろ外は

式も官もおじまのこと 或は中納言の息也

おろの院 弄 俗成也

おろろろのいよ 或は俗成の句也

おひの道は河万葉のこゝろ酒

のておひの道は河万葉のこゝろ酒

同はよめをこゝろ酒のこゝろ酒

おろろろろろ

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

おろろろろろ 弄 拍木おひ也

○女官の御あり 弄 三宮 世尊

○いふて一水 拍木の心也 落葉音は
ちろ時ハゆき心をうけてちろ落
○あひましの 細此やハ行末とあひましの
後悔也

○いそもや世秋古今 いろそりの
あひま今ハいろのいろそり

○いそもや世秋 弄 落葉音の母也
或秋一糸の心息不とり
よのいそりて 弄 母息不の拍木よの御也

○いそもや世秋 父母より夫婦の中へ

○いそも物 一 或秋 拍木病氣平愈也

○いそも物 一 或秋 世宮者病也
○いそもや 弄 拍木返香

いそも物 一 或秋 拍木病氣平愈也
いそもや世秋 弄 落葉音の母也
いそも物 一 或秋 世宮者病也
いそもや 弄 拍木返香

いそも物 一 或秋 拍木病氣平愈也
いそもや世秋 弄 落葉音の母也
いそも物 一 或秋 世宮者病也
いそもや 弄 拍木返香

○あつし人し或母一本人しし官位

○うしんるし五水 とうの

○あつしつら 弄 柏木余の

○えかこやちやちや 孟 女三宮と

○うしんるし 或母 三宮と柏木

○あつしつら 巴 柏木母詞我よ

あつしつら 弄 柏木余の
えかこやちやちや 孟 女三宮と
うしんるし 或母 三宮と柏木
あつしつら 巴 柏木母詞我よ
あつしつら 弄 柏木余の
えかこやちやちや 孟 女三宮と
うしんるし 或母 三宮と柏木
あつしつら 巴 柏木母詞我よ
あつしつら 弄 柏木余の
えかこやちやちや 孟 女三宮と
うしんるし 或母 三宮と柏木
あつしつら 巴 柏木母詞我よ

○あつしつらの中よ 或母 柏木兄才わき

○人とりつら 花 右衛門督ハ嫡子の心也
或母 以下 柏木三宮への

○今よると 或母 柏木ハ母の愛子也

あつしつらの中よ 或母 柏木兄才わき
人とりつら 花 右衛門督ハ嫡子の心也
今よると 或母 柏木ハ母の愛子也
あつしつらの中よ 或母 柏木兄才わき
人とりつら 花 右衛門督ハ嫡子の心也
今よると 或母 柏木ハ母の愛子也
あつしつらの中よ 或母 柏木兄才わき
人とりつら 花 右衛門督ハ嫡子の心也
今よると 或母 柏木ハ母の愛子也

○今のところの細 海軍官一戸也
巴枳 拍末末期より多ひて落 兼宮ありて

○今ゆへ河 随タニシ史記
細くゆえなり也

○今ゆへ河 兼致仕のく入 柏本より
○今やいとあり 孟 廿二宮也

○今ゆへ河 兼致仕のく入 柏本より
○今やいとあり 孟 廿二宮也

○今ゆへ河 兼致仕のく入 柏本より
○今やいとあり 孟 廿二宮也

○今ゆへ河 兼致仕のく入 柏本より
○今やいとあり 孟 廿二宮也

○今ゆへ河 兼致仕のく入 柏本より
○今やいとあり 孟 廿二宮也

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of the text above or a related passage.

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of the text above or a related passage.

